

## ブルジョワ気分でセックスしたいっ!

照山秋絵は福岡県福岡市南区井尻に住む、二十八才の主婦だ。人口百五十万人を突破した福岡市は、全国で六番目に人口が多いところ。照山秋絵は福岡市の生まれ育ち、夫の照山幸次郎も同じだ。

照山秋絵の身長は 158 センチ、B86 W59 H89 となかなかの身体であるけれど、顔は美人と言うより知的な印象を与える。

それもそのはず、秋絵は九州大学文学部国文学科を出た才媛で福岡市内の不動産会社に勤務した後、夫の幸次郎と結婚した。

夫の幸次郎は身長 178 センチと高く、やせ型で出身大学も秋絵と同じ九州大学で経済学部の卒業、二人は同じ歳で学

生時代には同棲していた。

秋絵の実家は福岡市内にあるけれども、東区にある九州大学には遠いため、大学のある箱崎という町に1LDKの広い部屋を娘に借りてやった。

大型冷蔵庫まで備え付けてやった父親の配慮は、幸次郎との生活に大いに役立った。大学四年の夏に同棲を始めた。

出会いは、その年の春に大学正門を抜け出た秋絵に後ろから幸次郎が声をかけたのだ。幸次郎は秋絵の大きな尻がぷるんぷるんと左右に揺れるのを見て、胸に込み上げるものを感じた、追いつぐると幸次郎は、

「ちょっと、君。いいかな？」

「えっ、なんですか。」

振り返って立ち止まった秋絵の顔は美人ではなかったけども、幸次郎の視線は秋絵の胸に移動すると、その豊かな膨

らみを認めて合格点を心の中で与えた。

「この近くで、お茶でも飲もうよ。」

「いいわよ。」

幸次郎の実直そうな顔はハンサムでなかったため、秋絵は安心したのである。つまり軽いナンパではないと、値踏みした。

秋絵のような知的レベルが高い女性に限らず、ハンサムな男性は女性は敬遠する。結婚するのにいやな男性の一番目は

女癖の悪い男

だそうだ。幸次郎は、

「じゃあ、連れて行くよ。」

と秋絵を誘導した。個室喫茶みたいなその店は、周囲を気にせずに話せるのがいい。

幸次郎は目の前に座った秋絵が大きく足を開いたので、白いパンティが眼に留まったが、すぐに秋絵は足を戻した。

幸次郎の口の中に唾液が出てきた。二十一歳の女性が持つ香りみたいなものを彼は、鼻一杯吸い込んだ。すると、股間のイチモツが少し反応してしまった。でもまず、会話をしなければ・・・

「君、頭がよさそうだね。」

と口火を切ると、秋絵は平然と、

「そうかなあ。文学部だから想像力の方が優先されると思う。」

「文学部ねー。ぼくは経済学部だよ。」

「それじゃあ、違いがありすぎるかもね。」

「男女の差ほどは、ないと思うよ。」

秋絵はくちびるの左右を両方上に上げた。目じりも笑って、

「気障な表現ね。それ。」

「文学的かな、と思って、言ってみただけど。」

すてきな人だわ、と秋絵は思った。この歳になるも男性経験ゼロの彼女は、男に声をかけられたのは、これが初めてではない。やはり、喫茶店に連れられて行って、さて話を聞いてみると英会話教材のセールスだったり、あやしげな新興宗教へのお誘いだったりした。

それというのも秋絵は二十歳までは貧乳だったし、貧尻だったのだ。ここ一年ちょっとで、大きく女としては発育したのだが、秋絵の身体を見て好色な視線を注ぐ男も、彼女の顔を見るとまともな顔に戻った。つまりは、秋絵を軽い女と見ないということで、これは正解だろう。

目の前の男は過去の男性とは違う、と秋絵は直感したので、

「文学も好きなのかしら。」

と、弱弱しく尋ねると、

「ああ。ぼく、文学部に入ろうと思ったんだ。そしたら、高校の担任の先生が反対してね。男は、経済だっていうものだから。」

「なるほど、そうね。わたし、兄がいるけど、やはり経済学部に通わせられたのよ。兄も文学好きだけど、うちは明太の会社ですから。兄は社長にならないといけないし、父が、

『文学部にどうしても入りたいのなら、学費は新聞奨学生にでもなって稼ぎなさい。』

と言うと、素直に経済学部に入ったのよ。京都大学のね。」

「京都大学になぜ？」

「うちは、もともと京都なのよ。でも京都も博多も美人の

産地だから同じね。わたしは美人じゃないけど。」

「そんな事ないよ。君は綺麗だ。というとお世辞めくから、  
本当のところは知的美人だな。」

秋絵は、うなずいた。その日は、それから携帯電話の番号  
を教えあって別れた。

それから数ヶ月後のある夏の朝、秋絵は幸次郎の荒々しい、  
いつものセックスを堪能していた。学生同棲である。鉄筋  
マンションの六畳の部屋で朝と晩、幸次郎に抱かれて九州  
大学に通った。

避妊具なしの性交は、幸次郎も覚悟の上だ。妊娠しても、  
出産は卒業後になる見込みで、秋絵が見込んだとおり幸次  
郎は真面目に二人の関係を考えていた。

勉強もあるし、週二回のペースでセックスに朝晩、一時間

ほど励む。若いのに少ないと思う奥さん方は、セックスレス夫婦も世の中には多いという事を考えるべきだ。

初めて知った男のちんぽを、秋絵のまんこは離さなかった。文字通り秋絵の膣は幸次郎の竹のような男根を力強く締め付けた。幸次郎は外は暑くてもエアコンの効いた秋絵の部屋で下の布団一枚で、秋絵の上に乗って高速度で腰を前後に振りながら、

「おおー、秋絵一つ、ちんこがしまっていていいー。あつ、出るっ。」

と叫ぶと、男の精密エキスを心置きなく放出すると、柔らかく大きな白い尻を若々しく震わせながら秋絵は、

「おまんこ、いいーっわっ。」

と叫んで、幸次郎の尻を両手で掴んで自分の方に引き寄せた。二十分の前戯と二十分の性交、二十分の後戯で朝晩の

セックスは構成されたが、この時間はそれぞれ短くなる事も多かった。

九大生でもあるし、試験前にはセックスを控えておいた。

試験が終わると徹夜でセックスに励む二人だった。

一晩最高、三回というのが幸次郎の記録である。秋絵の上で果てた後、幸次郎は、

「三回が限度だろう。度を超して射精すると下手したら死ぬかもしれないらしいよ。」

彼の顔を十センチ前で布団の上に横になって眺めながら、秋絵は、

「本当なの、それ？」

幸次郎は秋絵の大きな尻を優しくつかんで揉みほぐすようにすると、秋絵は、アアン、と眉を寄せて呻いた。幸次郎は、

「豊臣秀吉の本当の死因は、女とやりすぎたかららしい。

三百人以上の女性とセックスしたあと、秀吉は死んだんだって。」

秋絵は幸次郎の小さくなった肉欲棒を右手で掴んでみた。

すると、それは少し膨らんだ。

「そうなの。わたし、あなたに早く死なれたら困るわ。まだ学生だしなー。本当のセックスは、結婚してからね？」

「今でも世間のセックスレス夫婦よりは、セックスしているよ。そんな夫婦、奥さんが可哀想だよ。中には……。」

と秋絵の硬さの残った乳首にキスすると幸次郎は、話し出した。

関東の方の主婦でさー、カリスマ主婦っているんだよ。ア

フィリエイトですごく稼いでいてね。アフィリエイトってインターネットで、企業やお店の商品やサービスを紹介して儲けるんだけど。

その主婦のアフィリエイトへのきっかけが、だんなのボーナスが出なかった事らしい。

こどもの教育費だけでもと、その主婦は考えたらしいね。

---

---

「登喜子、すまない。おれ、今年の夏のボーナスはなしだ。」

敬二は妻に話した。

「しかたないわよ。社会的な不景気ですもの。でも、いいわ。夜のお勤めだけでもしてくれれば。」

三十後半の登喜子は、色っぽい眼をして夫を見た。敬二は、

「ああ。ボーナスがないぶんだけ、夜のボーナスを出すとするか。」

と食卓で子供の寝静まった頃に、妻に答える。

いそいそと、食器を片付ける登喜子に敬二は後ろから襲うように抱きつくと、彼女の首筋を舐めまわした。登喜子は身をくねらせながら、

「ここじゃ、やめて。子供に聞こえるかもしれないから。」

「いいさー、聞かれても。おれたちの子供だろ。」

敬二は固くなったモノを妻の尻に擦り付ける。じわーっと、まんこが濡れるのを登喜子は感じたが、

「あなたみたいなスケベに、なってほしくないもの。」

と笑うように答えると、ふっと敬二は登喜子から離れて、

「大体、子供の教育で疲れたとか言って、ここしばらくご

無沙汰だっただろう。だから、ボーナスないんだよ。」

「そんな・・・そんな事が、ボーナスと関係あるの?」

「いや・・・言いすぎだな。関係はない。不景気が原因だろう。でも、おれの性欲は好景気なんだよ。」

敬二は自分の方を振り向いて立ったエプロン姿の妻の両肩を捉えて、キスをした。すぐに敬二は舌を差し込んだ。妻は柔らかく、それに応える。ぐんぐんと敬二の肉欲棒は大きくなっていった。エプロンとスカートをしたままの登喜子のパンティを身をかがめて、ずり降ろした敬二は妻のエプロンとスカートを上に上げた。豊かな陰毛が丸見えた。敬二は妻を抱えて、台所の食卓の上に乗せると足を広げさせた。妻が腰掛けている食卓の部分は、いつも子供が食器に顔を向けているところだ。

登喜子は愛汁が溢れてきたので、声を出さなかった。敬二

は妻の両足を抱えるようにして、いつの間にかズボンのチャックから出している金剛のような棒を妻の開いた穴の中に挿入していった。

夫の首にぶら下がるようにして、声を出すまいと頑張った妻の登喜子は夫が割りと早く放出した時に、

「あ、はーんっ。」

と艶かしく悶えると、食卓の上で腰を震わせた。

銀座のキャバクラに立ち寄った敬二は、ナンバーワンのあゆみに、

「今月から愛人やめても、いいのね？」

とトイレの前で聞かれた。

「すまない。夏のボーナスの後払いにしてくれた君には悪いけど、次のボーナスは確かじゃないし・・・。」

あゆみは冷たい眼をすると、

「いいわよ。お金に予定立ったら又、声かけてね。」

すぐに背を見せて歩いて行くあゆみの尻を見て、半分ちん

こを勃起させた敬二ではあった。

数ヶ月、あゆみは敬二の愛人として都内某所にある彼女の

自宅の高級、高層マンションの最上階まで敬二は、退社後、

訪れていてはセックスレスとなった妻の代りにしていたの

だ。